

and glanced at the small LED screen. He was further confused because he didn't recognize the number. (Toxin p. 382)

□ be in bed with

想像をたくましくすればなんとも生臭い成句だが、これで昨今新聞紙上をにぎわすいわゆる「驚着」を表現せる。

"I've been told that you people work hard at going through the motions. I even hear you're in bed with the industry you're supposed to be inspecting." (Toxin p. 204)

現実を言葉で切るときに、この種の比喩的な表現が極めて効果的な実例である。表現する技法として平素より磨いておく必要があるだろう。

□ The hell / Like hell (used before a clause)

上掲の表現を何度となく目にするものだから、整理してみた。次の英文は、夫婦喧嘩の一場面であるが、主人の感情が高揚して、奥さんの発言を一蹴する気配が感じられる。

"What the hell do you mean?"

"This is about you, not about Becky. It's about you and your doctor ego."

"The hell it is." Kim growled. "I'm in no mood to listen to any of your psychological nonsense. Not now." (Toxin p. 174)

この用法の 'the hell' の定義は次のように示されている。

used to say that you do not believe what someone has said, or that you disagree with it (LDCB)

更に、'hell' という言葉に対する社会的基準からすれば、おそらく 'bull' あるいは 'crap' ぐらいの響きのある意味であろう。「つべこべ言うな」ぐらいの訳になるのではなからうか。

もう一例あげてみる。この場面は不正を暴くために夜中に女性食品検査員が食肉会社に忍び込んで、警備員にとがめられる場面である。

"I have a right to examine the logs."

"The hell you do," Jack said, while continuing to poke his finger at

Marsha. (Toxin p. 239)

やはり「つべこべ言うな」で読めそうだ。

ではこのへんで、「サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ」

私の勉強法

大田高等学校 八幡成人

毎朝アメリカ唯一の全国紙 USA Today (産経新聞扱い) や Los Angeles Times (海外新聞普及扱い) を読み、Asahi Evening News に毎朝掲載される悩み相談コラム "Ann Landers" に目を通すのが日課である。このコラムは口語英語の宝庫と言ってもよいもので学生時代からずっと読み続けているものだが、最近ではインターネットでも読める (<http://www.creators.com/lifestyle/landers/lan.asp>)。そのエッセンスは Ann Landers, *The Best of Ann Landers*: Her Favorite Letters of All Time (Fawcett, 1997) という本でも読むことができる。

小説では Ed McBain (Evan Hunter), Patricia Cornwell, Robin Cook, Danielle Steel, Harold Robbins, Arthur Hailey, Carolyn Keene の Nancy Drew もの、Robert Parker は新作が出る度に必ず読むようにしている。ミステリー系が多いのは学生時代に Agatha Christie を全作読んだことが大きく影響しているようだ。以前はアメリカのブッククラブに加入して安価でベストセラーを入手していたが、日本はサーブスからは買えなかったため、現在はピノロスの通販を利用している。洋販から毎月送られてくる新刊ニュースも貴重な情報源で、めぼしそうなものをピックアップしては読んでいる。収権としては「ああこんなふうにかい」と納得するような用例に出会うことが多い点である。最近のものではこんなものがあった。

He looked at her. She took a package of Virginia Slims from
an apron pocket, shook one loose, fired it up, blew a cloud of
smoke at him — Ed McBain, *The Last Best Hope*.

タバコの箱からひょいと振ってタバコを1本取り出すあの仕草である。ちょっと書き留めておくだけで利用できる。

最近の学習辞典の充実ぶりには目を見張る物があるが、辞書の拾い読みもいろいろ勉強になることが多い。最近『アクテイブジーニアス英和』がアメリカの学習辞典 *Newbury* の版權を買って用例を利用したと言って宣伝しているけれど、この辞典の語法注記の杜撰さは拾い読みただけでわかるはずである。「ライトハウス英和」のお手伝いをしていろいろ関係上、アルトハウス先生、バーナー先生の書き込み原稿を読ませていただく機会があり、分厚いノートにメモを取りながら読んでいるが、これがとてもいい勉強にな

る。例えば受験英語でもおなじみの *be willing to...* が、決して「喜んで〜する」という積極的な意味ではないことは、アルトハウス先生に教えていただいた。近年は日本のみならず、英米の学習辞典のラッシュにも驚かされる。島根大学の井上永幸助教授の「辞書メーカーングリスト」も辞書に限らず面白い情報が書き込まれており、大変参考になるので一度のぞいてみていただきたい。

私の趣味の一つに、アメリカのカードマジックの収集があるが、各社から送られてくる膨大なカタログ・パンフレットも貴重な研究材料である。ニューヨークに住む友人がテレビで放映されるマジック番組を録画して送ってくれる。これもいい材料になる。アメリカの雑誌・新聞類をまとめて送ってくれる教え子もいて有り難い。

最近では学習教材にも興味を持っている。参考書類はほとんど大同小異で、もう少し分かりやすい工夫はできないものかと考えているところである。そのいくつかは昨年11月の「達人セミナーin松江」の席でも報告したが、主な成果は、大田高校で週1回早期に開かれていた「ハちゃんの英語講座」に生かされている。

最近の大きな収穫の一つは、やはり何と言ってもインターネットの普及であろう。2学期のオーストラルコミュニケーションBの期末考査案にALTが「Do you pay by cash or by charge?」という文を書いてきたが、「現金で」は *in cash* でなかったかな? という疑問で(例えば *BBI* は *in cash* のみ)、*BNC(British National Corpus)* にあたってみると、*in cash* が509回、*by cash* が44回ヒットした。この数字を見れば、両形が使われていることが分かる。用例の中身を詳しく分析してみれば(簡易検索では50例しか見ることができないが)、どのような状況で *by cash* が好まれるのかも分かるだろう。このようなコーパスだけでなく、その他面白いサイトが数多くあり勉強になる。

パトリシア・ゴンザエルのベストセラーを翻訳で読んでいて、いわゆる警察用語での「Ten Codes」の理解が不十分であることに気づいた。どうも気になるのでインターネット上でいろいろと情報を集めてみた。さらに気になっていったことは、私の調べた警察のコードと *Ed McBain* が作品中の随所で使っている *ten codes* が、どうも一致しない点である(例えば、*Tricks* (p. 112, Avon)に出てくる幾つかのコードは、インターネットで検索した幾つかの警察の *Ten Codes* とは明らかに異なる)。 *Eight Black Horses*, p. 129 には、「10-13」の説明があつて「ASSIST POLICE OFFICER」のことだと書いてあるが、どこを調べてもこの情報が出てこない。そこでマクベイン通の直井明氏にお願いして、マクベイン本人に確認をとってもらった。するとまもなく彼が作品中で使っているコードはニューヨーク警察のもので、一般的なものを除き、全米バラバラ

であることが判明した(1988年5月7日付私信)。ご厚意で同警察のコード表もお送りいただき、長年のモヤモヤが氷解した。学生時代に読んだ、マクベインの *Dot1* という作品に出てくる「like sevens coming out」という表現の意味するところがわからず、四苦八苦してようやく探し当てたのも数年後であった(このレポートについては「研究紀要」No.21、松江南高校、1996年に書いたので参照していただきたい)。今では何でもない表現であるが、「rabbit test」がわからなくて必死に調べたのもいい思い出である。ヒントは意外な所に転がっている場合がある。やはり根気強く調べることが重要なのだろう。今気になっていることの一つは、ロバート・バーカーの小説に出てくる封筒の大きさが実在するかどうかという、全くもってどうでもいいようなことを検討中である。

このような勉強の成果は、「現代英語の語法観察(2)」(「研究紀要」No.22、松江南高校、1988年3月)や、長年毎週1回発行している学級通信「あびる」をご覧いただきたい。

『高英研』No.38

島根県高等学校英語教育研究会
1999年3月